

動物の時間 わたしの時間

TIME ④

イルカ

御蔵島沖の水深約1mの海中で
バンドウイルカの親子と泳ぐ。[撮影：岩重慶一氏]

言葉を交わすことのできない動物を
研究対象にしている人々。
飼育、観察、描画などを通して
探しているものは、何なのだろう。
動物を愛するひとりの人間と、
冷静な科学の眼を持つ研究者との
はざまで見つけた喜びと驚きを聞く。

どんなセラピーも、自分自身がセラピスト。 海やイルカを「知る」より、まず「感じて」ほしい。

2001年初夏。カンボジアにイルカの学校なるものが完成した。メコン川に棲むイラワジイルカを守るうと、
52歳の日本人が私費を投じて建てたのだ。話題の主は、岩重慶一氏。ふとしたことから始めた活動が、環境と経済の
両立という問題に解答を示すまでになったと注目されている。だが、活動の目的は、あくまでも、人の心を癒すこと。
いま、日本とカンボジアの障害者のための「イルカセラピー」に関心を寄せ、「人とイルカの新しい関係」の構築に挑戦している。

Text: Arihiro Nakata Photograph: Yukio Kubota

21世紀はイルカの保護に生きようと 会社をやめ、イルカの学校を建設!

横浜市内の住宅地。自ら指定した駅前の喫茶店に現れた岩重氏は、膨大な資料やポスターのパネル、ビニール製のイルカの人形などを抱えている。信託銀行をやめ、私費を投じてカンボジアにイルカの学校を作ったという氏の、ユニークさと力強さが伝わってくる。

ポスターの写真は、岩重氏が撮ったもの。水中のイルカの親子をとらえた、自慢の1枚だ。

「御蔵島の海、水深1mぐらいで撮ったんですよ。自然光が身体に縞模様を作ってる。きれいでしょう。でも、何がすごくて、子供が手前に写ってるんです。まず、あり得ないこと。子供を守ろうとして、親が前に来るのが普通だから」

イルカに受け入れられ、信頼されてこそそのショットだ。

この情熱的な岩重氏の、“イルカのおじさん”としての歴史の始まりは、1991年にさかのぼる。

「病室の天井が海になり、イルカが泳いだ」 パブルの後の、椎間板ヘルニア

1991年 信託銀行の融資担当として億単位のマネーを動かしていたある日、椎間板ヘルニアに見舞われ、1ヶ月入院。

「病室の天井が海になり、イルカが泳いでた」。入院が、社会に出て初めてと言っていい長期休暇となり、鹿児島生まれの岩重氏の心に、錦江湾で遊び育った幼い頃の記憶を甦らせたのだ。その頃、イルカは「そこに、普通に」いた。釣りや水泳をしていると寄っ



Keiichi Iwashige

イルカのおじさん

岩重慶一



て来て、邪魔をしたり、一緒に泳いだりする存在だった。すっかり忘れていたそんなことを、なぜか思い出したのだ。

退院後、たまたま東京で開かれた高校の同窓会でもイルカが話題になり、その場の勢いで「HAB21イルカ研究会」を結成。HABには、Human Animal Bond(人と動物の絆)の意味が込められている。さっそく、伊豆諸島の御蔵島を訪れ、イルカと泳ぐ。同時に、イルカに負けない体力づくりを始める。

1995年 世界のイルカについての勉強を始める。

「揚子江川イルカが絶滅の危機にあると知り、隣りのメコン川はどうなんだろうと思った。それで、イルカ研究の第一人者である大学教授に聞いて回っても情報を持ってなかったんで、じゃあ、自分が行ってみようかと。ちょうどその頃、JVC横浜支部のカンボジア市民フォーラムが招いた政府役人のセン・タナさんという人と出会い、メコン川にイルカがいるかと聞いたら、いると言う。調べると、そこもダイナマイト漁や環境悪化の影響で、絶滅寸前の危機だとか。そこで、すぐ保護活動を始めたわけです」

1996年 横浜市が募集する国際環境保全活動援助企画に、「カンボジア地域における魚類およびイルカ保護プロジェクト」なる企画書を提案し、見事、助成金を受け、12月に現地調査のためカンボジアを訪問。

「日本チームとして初のことだし、しかも市民ボランティアの調査隊だから、外務省にもカンボジア政府にも驚かれました」

ひとつめの成果はイルカ保護区指定の実現 ひとりの「想い」を、人脈と戦略でカタチに

1997年 第1回国際イルカ会議をカンボジアのクラチェ州で開催。

同年 自らの絵・文になる絵本『おでこちゃんとイルカのねがい』を出版。

1998年 東京水産大学大学院入学。専攻は資源管理学。

「資源管理学というのは、資源を維持しながら利用する方法について研究するもの。各種産業で起こる諸問題を、経済学、生態学、統計学、情報処理学等を使って総合的に解明するわけです。イルカを資源という視点から研究したいと思ったんです。幸いにも、自己啓発に理解のある会社でしたから、入学に際して人事部長が推薦状を書いてくれたんです。感謝してますよ。その人事部長とはいまでも講演などの形でつきあいがあります」



2001年6月、カンボジアのクラチェに完成したイルカの学校「HAB21センター」の前でスタッフと記念撮影。
上記写真3点は岩重氏提供



メコン川は子供たちにとって遊びと仕事の場。「この笑顔を守るためにも、いま取り組まない」と。



各地で開催されるイルカの学校では、ハンドサインも体験できる。写真は「直立」のサイン。

同年 カンボジアのクラチェ州カンピー村を中心とするメコン川流域約40kmがドルフィン・プール(イルカ保護区)に指定される。

2001年 3月東京水産大学大学院修士課程を修了。修士論文は「御蔵島のイルカを中心とした地域振興における公益信託受容の可能性について」。

同3月 早期退職制度により、29年勤めた信託銀行を退社。

同6月 カンボジアにHAB21センター、横浜に(合)HAB研究所を同時に設立。

東京水産大学客員教授を経て、東京大学大学院農学生命科学研究科獣医解剖学研究員として研究を続ける一方、現在、専門学校講師や大学のオープンカレッジ講師、文化センター講師(人と動物の新しい関係学とエコツアーリズム論)などを務めている。また、人と動物の関係学会理事、教育の原点を求めアガトスの会常任理事として働き、さらには企業団体学校での講演や、各地で“イルカの学校”の開催などに飛び回っている。

いろんなことをやっていますねと、その多彩な活動に感心すると、「いやあ、イルカのことだけだから」と、さりりと答える。が、好奇心と同時に、冷静に実現計画を立てる岩重氏が見える。

「想いを実現させるには、戦略が必要。銀行時代のノウハウとか人脈、大学教授という肩書きも役立つしね。まず、やりたいことを見つけたら、次は戦略。そして実践。戦略がないと失敗するよ」

そう語る岩重氏にとっての戦略の基本は、“これからの環境保護は、経済活動および地域活性化とリンクさせること”だ。多くの場合、生産者にとって経済価値の高いものは、自然環境保全に反する。しかし、自然を守ることが経済的な利益につながると実証されれば、生産者側、開発側を説得することは可能だと言う。

岩重氏の大学院での修士論文のテーマである公益信託は、まさにこの考えをまとめたものである。

同じ興味から「人流」が生まれ 「個」から「互」へ活動が広がる リンク論

人脈ということについても、岩重氏の考え方は面白い。それは、人脈というより、人流。同じ興味、同じ想いを持ち続けている人々がいれば、彼らはいつかどこかでつながる、というもの。それを氏はリンク論と呼んでいる。互いの時間が、どこかでピタッと一致する。この不思議な出会いこそ大切にしたいという。

そのためには、「個の尊重」が不可欠だともいう。自分が何なのか、相手が何をしようとしているのかを考え、組織ではない個人として主張・発信することが重要なのだ。

「ボランティアも、形から入るのではなく、想いから入るのが成功のコツ。まず人を集めて、というのでは必ず挫折してしまいます。自分がしたいことをひとりで始める。すべてそういう考えなので、イルカの観察会でもリピーターの参加は認めません。行き方、楽しみ方は一度教えたのだから、次は自分が仲間を誘って行けばいい。そうしてこそ、

輪が広がるというものでしょう?」

そうした輪の中で、知らなかった同士が出会い、行動が起こり、うねりになる。それが“リンク”の妙味なのだろう。

他者への愛情表現を鍛えるイルカセラピー
親子で感性を共振させてほしい

ところで、いまや「癒し」はブームを超え、定着の時期に入りつつある。先頃オープンした日本最大級のデパートでも、ほとんどすべての階に、癒しをテーマにしたスペースが設けられているという。各種のマッサージやセラピーも花盛りだ。

イルカセラピーも、すっかり有名になっている。岩重氏も、イルカを始めとする「アニマルセラピー」に力を入れている。

「だけど、結局、自分を癒せるのは自分自身なんです」

ちょっと驚く言葉だが、自らの体験でつかんだことだ。

「91年、退院後にイルカと泳いで元気になったときに感じたのは、自分が強くなるのがセラピーの始まりだということなんです。一緒に泳げる力をつけ、喜びをかみしめ、その喜びをイルカと共有しようとする。そうしてお互いがハッピーになろうとチャレンジするうち、いつの間にか、自分自身が癒されているということなんです」

イルカが出す高い周波数の音は、人間の脳を刺激し、アトピーや、自閉症など心因性の障害の治療によいのではないかということで注目されている。しかし実は、科学的なデータとして実証されているわけではない。なぜなら、犬や猫などの身近な動物とは違い、つかまえて調べることができないからだ。

アメリカのベッツィ・スミス博士はイルカセラピーについて、「治すとか治るということではなく、コミュニケーションができるようになることが大切だ」と述べている。子供の問題行動のほとんどは親への愛情確認のための認知行動だと考える岩重氏は、だからこそ親子ともにイルカと遊んでほしいと願う。

「感性を共振させ、心のふれあいの時間を楽しむことが、生きる力になるはず。過度の思い入れや干渉を捨てて、子供の自主性を、カマド番のように見守る姿勢でいることが子育てだと思っんです」

左右の脳をウェルバランスにして
自分ブランドを輝かせる

もちろん、イルカセラピーやアニマルセラピーは子供のためのものだけではない。

「アニマルセラピーは、私たちが親からもらった生得性(=感性)を触発させるために、成長生理的に右脳のコンピタンスを引き出す方法なんです。左脳は習得性、つまり知性や技術といった“生きる手段”に関する部分であり、学習で伸ばすことができます。対して、右脳は生得性、つまり感性という“生きる力”に関する部分。これは学習ではなく、体験で伸ばすしかありません。いいものを見たり、いい人とつきあったり、動物と遊んだり。そんな中で自分の劣っていることを知ることが、左右の脳のウェルバランスを実現し、次のステップへ向かう力になるんです」

これからますます「個」の能力や人格が問われ、それをアピールすることができる時代。企業のミッションの枠の中で、いかに自分の価値を高め、自分のブランドを輝かせ、夢を形にしていけるか。日々、目先の課題をこなすだけでなく、そういうことに思いをはせる時間を持つことも必要だろう。

あなたの右脳、いきいきしていますか?

いわしげけいいちの、
イルカと楽しく遊ぶなら!

イルカと遊んで癒しを体験するなら、やはり野生のイルカの方がおすすめ。水族館で飼われているイルカは、それがストレスになっていることもある。

いっしょに泳ぐコツ

我々人間は、「おじゃましている」という気持ちを忘れないこと。

水着は明るくカラフルなものが興味を引きやすい。

ゆったり自然に泳ぐ。

おもしろい動きをしてみる。

海中で横になり、おなかを見せてみる。

ドルフィンキックで泳いでみる。

静止して、アイ・コンタクトすると、気持ちが癒される。

「イルカの学校」教本より



取材協力:アステカ

Profile

岩重 慶一

1947年、鹿児島生まれ。下関市立大学を経て西南学院大学経済学部卒業後、三菱信託銀行入社。1998年、東京水産大学大学院入学。2001年資源管理学で修士号取得と同時に、三菱信託銀行(財務相談部)を退社。同年6月カンボジアにイルカの学校を建てる。長年、独自のドルフィンスイムとウォッチング法で、イルカと友達になる方法を研究。毎年、イルカ観察と「イルカの学校」を開いている。(御蔵島、和歌山県太地、カンボジア)。HAB研究所所長(パーソナルコンサルタント)、HAB21イルカ研究会代表、東京水産大学地域共同研究センター客員教授を経て、東京大学大学院農学生命科学研究科研究員。ヒトと動物の関係学会理事。国際ペットワールド専門学校講師(海洋哺乳類学・水界環境学)、国際エア・リゾート専門学校講師、日本テレビ読売文化講座(イルカセラピー担当)。著書に『おでこちゃんとイルカのねがい』(発行:リレーションズ)、『わたしたちはイルカの学校をつくった』(発行:エムティービー・アップルプランニング) HAB研究所ホームページ <http://www.dab.hi-ho.ne.jp/hab21/>